長保五年四月中旬

○夢よりもはかなき云々―弾正宮為尊親王の薨ぜられたことを下にふくんでいる。

*四月―はかなくて四月（応・寛）

*ついひぢ―はしの方をながむればついひぢ（応・寛）

○ついひぢ―築墻。土塀。

○すいがい―透垣。竹や板の垣で、板と板との間をすかしてたるを見れば故宮（応・寛）

*故宮―さしいでたるを見れば故宮（応・寛）

○故宮―為尊親王。冷泉天皇才三皇子。長保四年六月十三日薨。二十六歳（権記）。和泉式部はその愛人。

○小舎人童―普通は中将或は少将の召具する童。

○帥の宮―親王で太宰帥である方。ここでは敦道親王。親王は、冷泉天皇才四皇子で、為尊親王の弟。

*けけしう―けぢかう（応）

夢よりもはかなき世の中を歎きわびつつ明かし暮らすほどに、四月十よ日にもなりぬれば、木の下暗がりもてゆく。*ついひぢの上の草青やかなるも、人は殊に目もとどめぬを、あはれとながむるほどに、近きすいがいのもとに人のけはひすれば、誰ならむと思ふほどに、故宮にさぶらひし小舎人童なりけり。あはれに物のおぼゆるほどに来たれば、

〈女〉「などか久しく見えざりつる。遠ざかる昔のなごりにも思ふを。」などいはすれば、

〈童〉「そのこととさぶらはでは、なれなれしきさまにやとつつましうさぶらふうちに、日頃は山寺にまかりありきてなむ、いとたよりなくつれづれに思ひたまうらるれば、御かはりにも見たてまつらむとてなむ、帥の宮に参りてさぶらふ。」と語る。

〈女〉「いとよきことにこそあなれ。その宮はいとあてにけけしうおはしますなるは。昔のやうにはえしもあらじ。」などいへば、

〈童〉「しかおはしませど、いとけぢかくおはしまして、『つねにまゐるや』と問はせおはしまして、『参り侍り』と申し候ひつれば、『これもて参りて、いかが見給ふとてたてまつらせよ。』

○橘―（垂仁）天皇命二田道間守一遣二常世国一令レ求二非時香菓一。今謂レ橘是也（書紀）

○昔の人の―さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（古今集、夏、読人しらず・六帖・伊勢物語）

○かをる香に―弾正尹為尊のみこかくれ侍りて後、太宰帥敦道のみこ花橘を遣はしていかが見るといひて侍りければ遣はしける、和泉式部（千載集、雑上）。帥の宮、橘の枝をたまはりたりし（家集）

*かくれの方に……御覧じつけて―けしきばみありく。かくれの方に御覧じつけて（応）

・けしきばみありけばかくれの方にて御覧じつけて（寛）

○同じ枝に―弾正尹為尊親王かくれ侍りて後橘を和泉式部が許につかはして侍りければかをる香によそふるよりは郭公きかばや同じ声やしたるといへりける返事に、太宰帥敦道親王（新千載集、雑上）返し（家集）

*ずや―なむ（寛）

*たまふ―童にたまふ（応・寛）

*又―又の日（応・寛）

○うちいでても―和泉式部につかはしける、太宰帥敦道親王（新勅撰集、恋一）

とのたまはせつる、」とて、橘の花をとり出でたれば、「昔の人の」

〈女〉といはれて、

〈童〉「さらば参りなむ、いかが聞こえさすべき。」といへば、言葉にて聞こえさせむもかたはらいたくて、何かは、あだあだしくもまだ聞こえ給はぬを、はかなきことをもと思ひて、

〈女〉かをる香によそふるよりはほととぎす聞かばや同じ声やしたるとときこえさせたり。まだはしにおはしましけるに、この童、かくれの方にけしきばみけるけはひを御覧じつけて、

〈宮〉「いかに。」と問はせ給ふに、御文をさし出でたれば、御覧じて、

〈宮〉同じ枝になきつつをりしほととぎす声はかはらぬものとしらず

と書かせ給ひて、

〈宮〉「かかること、ゆめ人にいふな。すきがましきやうなり。」とていらせ給ひぬ。持てきたれば、をかしと見れど、常はとて御返り聞こえさせず。

たまはせそめては、*又、

〈宮〉うちいでてもありにしものをなかなかに苦しきまでも歎く今日か